

ぼうけん ワタルとミティの冒険

あめのひかり & ^{わたる}航



Art by ソフ sof

ワタルは、^{ぎんがけい} 銀河系の^{ちきゅう} 地球という^{ほし} 星の^{にほん} 日本に

^{すむ} 住む、^{しょうがっこう} 7さいの小学校^{1ねんせい} 1年生の^{おとこ} 男の^こ 子。

^{がっこう} 学校に^{なれ} 慣れ、^{おともだち} お友達も^{すこし} 少しずつでき始めま
した。

^{おたんじょうび} ワタルのお誕生日がありました。

パパには、ワタルが^{まえ} 前から^{ほしかった} 欲しかった、お
もちやをもらいました。

そして、ママからは・・・

^{すうじつまえ} 数日前、^ま ママの^{おともだち} お友達と^{3にん} 3人で^{あった} 会ったときに、

^{ひと} その人が、ユニコーンのバックをもってい
て、^{おもい} うらやましいって思いました。

だって、ワタルはユニコーンが^{だいすき}大好きなの
です。

^{りゆう}理由は、わかりません。ただ、^{うまれたとき}生まれた時か

ら、^{ものごころ}物心ついたときから、ユニコーンが

^{だいすき}大好きなのです。^{ペガサス}ペガサスも。^{いちばん}ただが一番は

^{だんぜん}断然、^{ゆにこーん}ユニコーン!!!

それで、ママに「ぼく、^{おたんじょうび}お誕生日に、ユニ

コーンのものが^{ほしい}欲しいなあ・・・」

と^{ねがい}お願いしてみました。

^{きのう}昨日、^{おいえ}お家に^{かえったら}帰ったら、ユニコーンと、ペ

ガサスと、^{すてき}素敵な、^きかっこいい、「木」の3

つがありました。

とっても^き気にいって、

「わー——・・・」と^{こえ}声をあげたワタル。

^{たいせつ}大切にしようと^{おもいました}思いました。

ママの^{ゆめ}夢

^{つぎ}次の日、ワタルが^{いえ}家に^{かえる}帰ると、ママが、お
はなしを^{はじめ}始めました。

「ママ、なんだか、あのレプリカのユニコーンが、^{いき}生きているみたいにかわいく^{かんじ}感じてたの。そして、いつの間^まにか、手^てに^{もって}持ってたの。寝^ねち^{ちゃ}った^たの。」

「えー？壊れちゃうからき気をつけて。僕ぼくの

たからもの
宝物だから！」

「ごめんね。でも壊れこわれなかつたなかったよ。^^ ;」

「それでどうしたの？」

「そしたらね、夢ゆめの中で、声こえがするの。『ワ

タルめざめの目覚め』 『あいあいだよ』ってね。

「あい？」

「あいってわかるかな・・・」

「おとこの人ひとが、おんなの人ひとをすきになる
こと？」

「うん。それもあるよ。」

「この場合は、ママばあいがワタルままをどう思わたるって
おもって

いるか、ちかいに近いかな」

「ママは僕のこと、すき？」

「大好きだよ。すごく大事。世界中のママた

ちが、子供に対して持つ気持ち。」

「ふーん」

「一番の宝物。っていったら分かるかな」

「うん」

「それで、チビさんのユニコーンがでてきたの。それで、ママは『コンニチハ。あなたはだれ？』って挨拶したの。」

チビユニ「ぼくはワタルくんなの。名前は
まだないよ。ワタルくんがつけてくれるよ。

ワタルくんは、まだ僕に気づいてないけど

ね」

ママが「^{だいすき}大好きよ」というと、

ユニコーンも「^{ぼく}僕も^{だいすき}大好きだよ」と^{こたえ}答えました。

ここで、ママは何とも^{なん}言えない^{いえ}懐かしさが

^{こみあげて}こみ上げて^{ない}泣いた^{たん}んだって。

^{ちびゆに}チビユニコーンは^{うれしそう}嬉しそうに^{はねまわ}跳ねまわったり、ジャンプしたりします。

そして、ママにはそのユニコーンの^{まわり}周りに

^{とんで}飛んでいる、^{ふしぎ}不思議な、^{ママ}ママがこれまで、

^{ずかん}図鑑でも^{みた}見たことがないような、きれいな

ちょう
蝶みがとんでいるのを見ました。

そして、ユニコーンがしろいりゅう白い龍かわりに変わりました。

ちきゅう おりて ちきゅう まわり
地球に降りてきて、地球の周りをぐるぐる

まわったり、まママのむねのはーとハートのまんなか真中を

とおりにぬけたり
通り抜けたり……。

ここで、ママが聞ききました。

「どうして、すがた姿すがたがかわったの」って。

そしたら、ユニコーンは、「ちきゅう地球ちかづくに近づくと

しぜん自然はどうと波動かわってが変わって、みえる見えるすがた姿も

かわるん変わるんだよ」って。

そして、ママは「ミティ」という^{ことば}言葉をきいたんだって。

^{しろいりゅう}白い龍は、^{こんど}今度は^{そら}空に^{むかってとんで}向かって飛んで、
^{あかいりゅう}赤い龍になりました。

そして、もっともっと^{うえ}上に^{とんで}飛んでいきます。

^{ちきゅう}地球から、^{うちゅう}宇宙へ。

そして、その^{すがた}姿は、^{きんいろ}金色の^{とり}鳥に^{なりました}成りました。

^{ママ}ママ「あの^{とり}鳥に^{のって}乗っているのは^{わたしたち}私たち？どこにいくの？」

ミティ(ユニコーン)「どこにも^{いかな}行かないよ。

^{ぼく}僕たちが行くんじゃないくて、いろいろな

そんざい　ちきゅう
存在が、地球にやってくるよ」

ママ「ありがとう。ミティ。だいすき
大好きだよ。

ワタルを見守ってね。ワタルがじしん
自信を

もって、しん　じぶん　であえる
持って、真の自分に出会えるように。

みえないせかい　おもいだす
見えない世界もあると、思い出すように」

みてい　ほうほう
ミティ「その方法はね。ママの『あい』だ
よ。」

ママはまたここでないて
泣いてしまいました。

そして、め　さました
目を覚ましたのでした。

ワタルとミティのがったい
合体

ママが「先生」という人から聞いたたら、

ミティ、は、日本語に直すと、「未来」とい
うんだって

あとで、ママが言ってたんだけど、ママの

お話を聞きながら、実はミティが僕の中に

入ったみたい、ってママが。

ミティはワタルの中なかにいる、ワタルの本体ほんたい、

もうひとつの姿すがただよって。

えー……。そんなの信じられる？だって僕

には見えないのに……。

でも、おむねのあたりが、あったかくなっ
てきたよ……。

ママはペガサス？

よる
夜になって、おふとんはいるとき、ママが
いいました。

「ママ、自分の本体に会う前に、ワタルの
本体に会っちゃったね。ママの本体は何だ
ろう・・・。」

「ペガサスじゃない？」

「そうかもね。ママもそんな感じがするん
だ。だって、あのプレゼントのユニコーン
とペガサスは兄弟みたいに仲良かったもん
ね。ペガサスがママかな・・・。」

その夜また、ママが夢を見ました。ユニコ

ーンと、ペガサスがアンドロメダにいるところ
です。(なぜ、そこがアンドロメダとわ
かったのか、はわからなくて、ただ、わか
った、ようです。)

ママが^{あさ}朝になり、^{わたる}ワタルに^{きいて}聞いてみました。

「^{きのう}昨日、^{ママ}ママ^{ゆめ}夢を^{みた}見た^{んだ}んだけど、^{わたる}ワタルは
^{みた}見た？」

「うん！ママと^{ぼく}僕がユニコーンとペガサス
で、^{ほし}アンドロメダっていう星にいるんだよ。

あんまり^{おぼえて}覚えていないけど、^{ぼく}僕、そこ
^{しってる}知ってるの。」

お風呂の中のお話

おはなし きいて わたる
ミティのお話を聞いて、しばらく、ワタルの

むね まんなか
胸の真ん中があったかかったのだけど、

がっこう じかん
学校にいて、時間がたっていくと、あつ

かんじ ちいさく
たかい感じが小さくなっていきまし
た……。

よる まま お風呂 はいって まま
夜、ママとお風呂に入っていると、ママが

わたる すき えいが まほう がっこう
「ねえ、ワタルが好きな映画で、魔法の学校

おとこ こ
にいく男の子の話が、あるでしょ？」

「うん」

しゅごれい よぶじゅもん
「あのなかで、守護霊を呼ぶ呪文があった

おぼえて
の覚えている？」

「うん！エクスペクト・・・なんとか・・・」

「そうそれ！その中で、^{おとこ}男の^こ子が、^{じかん}時間を

^{さかのぼって}遡って、^{じぶん}自分と^{たいせつ}大切な^{おとこ}男の^{ひと}人を^{たすける}助けるため

に、その^{じゅもん}呪文で、^{しゅごれい}守護霊を、^{よびだした}呼び出したで

しょ。^{なに}何が^{でて}出てきたか、^{おぼえてる}覚えている？」

^{ひかり}
「光？」

「うん、^{ひかり}光も^{でて}出てきたけど、^{なに}何かの^{どうぶつ}動物
が・・・」

「ペガサス！！！」

「そう！あれは^{おじか}牡鹿・・・でも、・・・ワタルの

^{なか}中の^{そんざい}ミティはそういう^{ふだん}存在だよ。普段は、

^{みえない}見えないし、^{しんじないひと}信じない人には、^{みえないん}見えないんだ

けど、みんなの中なかにいるんだよ。」

「うん。わかった。」

ワタルは、もやもやがすっきりしたように

感じかんじました。

「じゃあ、ママの中ちゅうにもペガサスがいるんだねっ」

「うん。そうだね」

アンドロメダへのたび旅

その夜、ワタルは夢ゆめを見みましたました。

ひろいひろいそうげん はな ことり ちょう
広い広い草原、花や、小鳥や、蝶が、たく

さんいます。(草くさも花はなも存在そんざい感かんがあって、「い

る」という表現がぴったりだと思いました。

そして、木々が、まるで、人間のよう、

生きて、今にも話しだしそうに感じました。

まるで、大好きな、毎晩ママに読んでもら

っている、あのライオンやネズミが話す、

お話のように……。

空も不思議です。この空は、太陽は、お互い

に溶けあっているかのように、優しいひかりです。

柔らかい、ピンク色のような……。

そして、雨が降ったわけでもないのに、ワ

タルがこれまで見たことのない完璧な虹がかかっています。

「わー・・・僕が観た中で、いちばん、完璧だ。」

しばらく、景色に見とれたり、お花のいいにおいをかいだり、走り回ったりして、のどが渴いているのに、気がつきました。

「のどがかわいちゃったな・・・」

「それにしても、なんで、ぼくひとりなのかな」

とおく みず おと きこえます
遠くから水の音が聞こえます。

おと
音のほうにいてみると、ごごご・・・・

おと たき み え ま
という音と、滝のようなものが見えました。

もり ぬ け て ち か づ く お も わ ず い き
森を抜けて、そこに近づくと、思わず息を
するのを、わすれて
忘れていました・・・・。

み た たき
そこで、見たのは、滝・・・・でもワタル
がしているたき ち が い ま す
がしている滝とは違います。

みず かる い かんじ
水が、とっても「軽い」感じがするのです。

たき なんじゅう にじ
そして、滝に何重にもかわいい虹がかかっ
ています。そして、そのうしろ み た
後ろにさっき見た、

かんぺき にじ ゆめ なか
完璧な虹が・・・・。まるで、夢の中のよ
うです。

たき まわり いし きらきらひかってみえ
滝の周りの石もなにかキラキラ光って見え
ます。

しばらく、またみとれて……。

「あっそういえば、ぼく、のどがかわいて
いたんだった！」

たき つながるながれ みず み
滝から繋がる流れで、水をのものと、身を
かがめ おと のみました
屈め、ごくごくとおとをならして飲みました。

「あー……なんておいしい水なんだろ
う……。とってもあまい！」

たい ちから みず
体に力がわいてくるような、そんな水です。

ふしぎ おさまりま
不思議とおなかのすいていたのも収まりま
した。



であい ペガサスとの出会い

みる みず しろいうま うつって
ふと見ると、水に白い馬が写っていました。

つの
角があります。

「あっ、ユニコーンだ！」

ワタルは心こころの中なかで思おもいました。

「それは、あなたですよ。」と声こえがしました。

見みるると、美うつくしいペガサスがが向むこう側がわに立たっ
ています。

そのペガサスがしゃべっています。

そして不ふ思し議ぎなことに、ワタルの考かんえてい
ることが、わわかるみたいなのです。

「あなたは、今いま、ユニコーンゆにこーんの姿すがたなのです
よ。それが、もうひとつのあなたの姿すがたなの。」

「えっ？」

そう言いわわれてみれば、流ながれに写うつるユニコー
ンは、ワタルの動うごきとおんなじことをしま

す。。。。。

「ぼく、ユニコーンなんだ」

「そうよ。ミティ」

「あっママ！！！」

ワタルは一瞬^{いっしゆん}、思い出^{おもいだ}しました。

ママユニコーンのペガとここでくらしていたこと。

何か^{なん}、大事な^{だいじ}ことをしている途中^{とちゆう}だったこと。。。。。

ユニコーン^{しょうがっこう}小学校

あるひ、ミティであるワタルは、ユニコー

しょうがっこう
ンの小学校にいました。

しょうがっこう おはなばたけ
小学校は、お花畑にあります。

いろ はな さいて
色とりどりの花がいつでも咲いていて、と
すてき
っても素敵です。

おはな いろ にじいろ
お花の色は虹色です。

す ご し ま な
チビユニコーンは、みんな、ここで過ごし学
びます。

もり まいにちかえるん
おうちがある森には毎日帰るんだよ。

しょうがっこう せんせい おともだち
小学校には、ミトラシュカ先生や、お友達
がいます。

せんせい すこしちいさく
ミトラシュカ先生は、ママより少し小さく

こえ うたう やさしい
て、声が歌うように優しい、ペガサスです。

わか く み え る わ た し
「若く見えるけど、私たちのママよりもか
なり年としは上うえなんだって。」

お ん な こ お し え て
女の子ユニコーンのロウラルが教えてく
れました。

せ か い き ょ う し お し ご と
「この世界では、教師としてのお仕事を

え ら ぶ ば あ い お や け い け ん お え る
選ぶ場合は、親としての経験を終えるか、

え い ち や し な っ て
たくさんの叡智を養ってからでなければ、

こ ど も お し え る
子供たちに教えることはできないんだ。」

あ た ま お と こ こ
頭のよさそうな男の子ユニコーンのケン
トです。

こ ど も れ い て き せ い ち ょ う
「だって、子供の、霊的な成長とミッショ

え い き ょ う あ た え る そ ん ざ い
ンにとっても影響を与える存在だから」。

「そうなんだ。」ミティは^{こたえた}答えただけで、
(レイテキってなんだろう。^{いま}今は、よくわ
からないや……。)

「^{せつめい}ご説明をありがとう。」ミトラ^{せんせい}シュカ先生
^{わらいます}が笑います。

ここでの^{かいわ}会話はテレパシーがメインなので
すが、^{こどもどうし}子供同士では、まだうまくコントロ
ールができません。なので、テレパシーも
^{ちょうせつ}調節して、^{つたえたいあいて}伝えたい相手にだけ、というわ
けにはいきません。

^{とうぜん}当然ですが、^{せんせい}先生には、^{ぜんぶつつぬけ}全部筒抜けです。

「聞こえちゃったね！！」^{3にん} 3人は^{わらい} 笑いました。
た。

^{せんせい} 先生も^{わらって} 笑っていました。

ある日、^ひ 先生が^{せんせい}

「もう少ししたら、^{すこし} 少しずつ、^{おそら} お空を^{とぶ} 飛ばす

^{れんしゅう} 練習を^{はじめます} 始めます」と^{いいました} 言いました。

^{ふだん} 普段は、みんながやりたいことを、^{そうだん} 相談し

^{きめる} て決めるのですが、

^{きょう} 今日^{せんせい} は先生がこうだったので、みんなびっ
くり！

「えー！」「どうやって？」ミティとロウラ

^{どうじ} ルが同時に^{さけび} 叫びました。

ケントは知^しっ^てているのか、笑^わっ^ていました。

「大丈夫^{だいじょうぶ}ですよ。みんな、そろそろ、背^せ中^{なか}がムズムズしてくるはずだから」

そうい^いっ^て、先^{せん}生^{せい}は、笑^わっ^ていました。

小^{しょう}学^{がく}校^{こう}が終^おわ^り、ミティはお母^{かあ}さん^{さん}の待^まっ^つ、森^{かえり}に帰^りま^した。

そして、先^{せん}生^{せい}が言^いっ^ていたことを、お母^{かあ}さん^{さん}に話^わし^ます。

「まだ、僕^{ぼく}、羽^はも生^はえ^ててないのに。」

「大丈夫^{だいじょうぶ}。みんな、そろそろ、生^はえ^ててくる

時^じ期^きです。子^こ供^{ども}のユニコーンは、ある時^じ期^きが来^くると、小^ちい^{さい}い羽^はが生^はえ^ててくるんですよ。」

しばらくして、お友達ともだちの中なかの何人なんにんかは、背せ中なか

に小ちいさな羽さはねがはえててきました。

いちばんいちばん はえててきたのは、少すこしお兄おにさんいさんのケルン。

「み見せてー！！」みんながあつまります。

ケルンは、少すこしだけ得意とくいそうそうに話はなします。

「きのう昨日きのうから、ずっとムズムズしてたんだけ

ど・・・朝あさ起おきたら、はえてていたんだ！」

おとなおとなのペガサスくらべたに比くらべたら、とちいっても小ちいさ

くて、頼たりない羽いはねですが、羽はねには違ちがいあり
ません。

みんなは、憧あこがれそんけいと尊そん敬けいのまなざしみで見つめ
ます。

せんせい
先生がいました。

はね はえたこ とんで
「羽が生えた子から、飛んでみましょう。」

と
「どこから飛ぶの？」

いま
「今にわかりますよ。」

とき おおきなかげ そら おおいます
その時、大きな影が空を覆います。

「うわー！！！」みんながさげびます。

きょだい しろいりゅう おりて
みあげると、巨大な白い龍が、降りてきました。

お お し い ちからつよいすがた
なんて雄々しい力強い姿でしょう。でもち

こわいかん
よっと、怖い感じもします。

「わー！！」ミティはその大きさと威厳の

すがた いき
ある姿に、息をのみました。

でんせつ きいた じっさい
伝説では聞いたことがありましたが、実際

いき たほんもの りゅう しろいりゅう
に、生きた本物の龍には、しかも白い龍に

はじめてであいました
は、初めて出会いました。

こううん しんせい はくりゅう
幸運をもたらす、神聖なる白龍。

いげん えいち ますたーしゅうだん しろいおひげ
威厳ある叡智のマスター集団、白いお髭の

おじいさんたちの化身の一つとも言われて
います。

いま りゅう せなか
「今から、みんな、この龍の背中にのせて
もらいます。」

「わーーーーーい！！！」

りゅう みる はじめて
龍を見るのも初めてなのに、のせてもらえ
るなんて！！！」

「やったー！やったー！」ケルンが叫びます。

みんなもおよろこび大喜びです。

「先生、僕、まだ羽が生えてないから、
乗れないの？」不安になってミティが
聞きます。

「いいえ。全員乗ります。飛べない子は、
落ちないように気を付けながら、みんなの
応援をして、見て覚えてね」

ミティもみんなにならって、おそろおそろ
龍の背中に乗ります。

子どもユニコーンを13頭乗せても、まだ、

よゆう 余裕があるくらい、 りゅう せなか おおきく 龍の背中は大きくて、

ひろかった 広がったので、みんなびっくりでした。



ゆめ おはなし 夢のお話

「あー・・・」目が覚めて、航はがっかり

しました。夢だったんだ・・・。

まだ6時15分。ママはまだ寝ています。

「ママー・・・」

「んー・・・もうおきたの？」

「ママ！ぼく夢を見たんだよ！！」

そして、航は夢中で、今見た夢を話します。

ペガサスのママと会ったこと。小学校のこ

と。先生せんせいのこと、龍りゅうが来て、背せ中なかに乗のって、

羽はねが生はえていてる子こは、お空おそらを飛とぶ訓くん練れんをす
ること。

「そう！楽たのしそうだね！！」

「うん！」

「全ぜん員いん、飛とべたたの？」

「うん！時じ間かんはかかったけど、最さい後ごになっ

てみんな飛とべたたの！そして、飛とべたらら、み

んなユニコーンの中ちゅう学がっこうに行いくんだ
よ！！」

確かく信しんに満みちて話わすワタルは、ななぜか、それ

が夢ゆめではないことを知しってっていました。

つづく